

# 「文人図書館長・島尾敏雄コレクション」の 形成過程に関する一考察

工 藤 邦 彦

## 【要 旨】

奄美大島名瀬在住時に作家、郷土史家、教師、司書と多彩な側面をみせた文人図書館長・島尾敏雄が鹿児島県立図書館奄美分館と後継の県立奄美図書館に遺したコレクションの形成過程を検証した。「島尾敏雄コレクション」は、その形成過程から広域の地域・郷土資料群を意識した「琉球弧的資料群」と、島尾文学の源流である「文学館的資料群」とに大別できる。

## 【キーワード】

鹿児島県立図書館奄美分館・奄美図書館、島尾敏雄、コレクション形成、郷土資料、文学資料

## はじめに

九州各地では、2013（平成25）年から2014（平成26）年にかけて米国からの奄美群島日本復帰60周年を記念し、戦後における奄美のあゆみを辿る試み<sup>1)</sup>がなされてきた。図書館界では奄美市名瀬にある鹿児島県立奄美図書館（以下、奄美図書館）の企画により、奄美群島5島と鹿児島市において『復帰関係資料巡回展』を開催、併せて『奄美図書館所蔵関係資料一覧』を発刊、奄美図書館公式ウェブサイトで書誌を公開した<sup>2)</sup>。この一連の企画は、「奄美大島日本復帰協議会の資料が、そっくりそのまま島尾敏雄氏などによって保管されていた」（田畑 2004）ことから奄美大島（以下、大島）に約20年間、居住した島尾敏雄（以下、島尾）の業績に拠るところが大きい。

島尾は、第二次世界大戦末期に大島南部の加計呂麻島に駐屯、戦後は再び大島に戻り、奄美日米文化会館（以下、日米文化会館）の館長に就任、鹿児島県立図書館奄美分館（以下、奄美分館）の分館長を併任した。再来島の際、既に島尾は私小説家として著名であり、「文人図書館長」と位置づけることができる。なかでも島尾の図書館史的評価は、本を携え群島全域を巡回する貸出文庫、奄美郷土研究会の再興、読書会の創設など文化振興に焦点があてられてきた（井谷2007a 2007b 2015）。

一方、島尾が積極的に取り組んだ郷土資料の組織化については、奄美分館の刊行物によってコレクション<sup>3)</sup>の量的状況までは示されてはいるものの、形成過程までは触れられておらず、島尾の収書意識や分館長退任後における組織化業務の全容も明らかになっていない。

本稿では、特色ある奄美群島の図書館運営を検証する一環として、奄美分館、後継の奄美図書館

におけるコレクションの形成過程について、目録整備事業に着目のうえ検討する。なお、島尾が目録編纂に関わった時期を起点に、奄美図書館が現在まで整備したコレクション形成の結果をふまえ、その総称を「島尾敏雄コレクション」（以下、「島尾コレクション」）と命名、定義する。

## 1. 大島の図書館事情

奄美群島のうち、有人島は8島で構成されている。1953（昭和28）年12月25日、奄美群島は日本に復帰したが当時の人口は約20万であった<sup>4)</sup>。昨今、群島の人口は半減し、そのうちの約38%が大島の拠点都市である奄美市に居住している<sup>5)</sup>。奄美市は広域市域であるが、なかでも旧名瀬市域に1948（昭和23）年、奄美博物館図書室が開設、米軍政府指導によるInformation Centerの設置やカトリック教会図書館の創設など、複数の図書館機能が立ち上がった（井谷2007a 2007b）。2009（平成21）年4月に開館した奄美図書館は、Information Centerが源流となる大島文化情報会館、奄美琉米文化会館、奄美文化会館の成立、解消、再編など複雑な軌跡を遂げた。なかでも中興期に位置づけられる日米文化会館と奄美分館において司書として勤務した島尾の業績が顕彰されている（井谷2015 早野2015）。

奄美分館の特徴として、各町村の教育委員会事務局や中央公民館が設置した配本窓口である貸出文庫出張所<sup>6)</sup>による地方奉仕が挙げられる。特に活動が顕著な自治体として、大島海峡を挟んだ加計呂麻島を奉仕エリアに持つ大島郡瀬戸内町がある。1994（平成6）年、中心地である古仁屋に瀬戸内町立図書館・郷土館が設置され、開館当初より『島尾敏雄文学コーナー』が併設された【図1】。また、奄美市については前述の奄美図書館が設置されているが県立であり、旧名瀬市誕生以来、市立図書館が存在しない街である。よって、前身の奄美分館開館以来、旧名瀬市域の中核図書館としての奉仕業務も補完している状況にある。

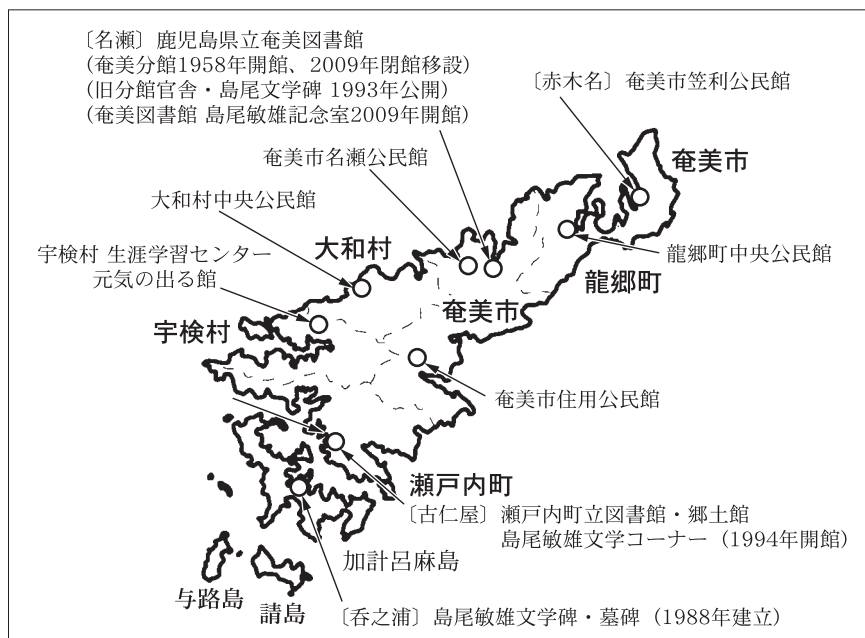


図1 大島の図書館・中央公民館および島尾文学関連施設 設置状況

## 2. 大島在住時の島尾：その人物像

大島と島尾との関わりは、以下のとおりである。島尾は1917（大正6）年に神奈川県横浜市で6人兄弟の長男として生まれ、1943年（昭和18）年に九州帝国大学を繰り上げ卒業し、第三期海軍予備学生となる。1944（昭和19）年11月、第十八震洋隊（魚雷艇）隊長となり、加計呂麻島の呑之浦に基地を設営、出撃命令を待つうちに終戦となり、九死に一生を得る。島尾は、駐屯中に島の押角集落の国民学校代用教員でのちの妻となる大平ミホ<sup>7)</sup>と恋仲となり、1946（昭和21）年に神戸で結婚する。上京後にミホ夫人が心因性神経症を発症、治療のため、1955（昭和30）年10月、名瀬市に移住、1957（昭和32）年12月、鹿児島県職員となり、日米文化会館館長に就任、翌年4月に奄美分館長を併任した。以降約17年間、分館長と文筆活動との二足の草鞋を履くが1975年（昭和50）年4月分館長を退任、その後は奄美を離れ指宿市二月田、神奈川県茅ヶ崎市と転居を重ねた。再び奄美に近づき、鹿児島県加治木町や鹿児島市内に居を構え、鹿児島純心女子短期大学教授と同大学図書館長を兼務した【表1】。しかし、1986年（昭和61）年11月12日、出血性脳梗塞のため、69歳で急逝する。

島尾は、幼少期より家業の関係や学生生活で全国を移動するなど、いわば「一種の故郷喪失者」（島尾ミホ、志村 2000）であった。名瀬在住の詩人で写真店を営む藤井令一は、島尾を「永劫の旅人」（藤井 2003）と称し、島尾の名瀬での約20年間の仕事を“外”と“内”という区分から評価した。具体的に“外”については、史学者としての「ヤポネシアの概念による日本の歴史や、文明化への批評と同時に、日本の根の島々、現像の島々としての《琉球弧》、あるいは《ヤポネシアの根っこ》の認識の伝播」を挙げた（藤井 2005）。“内”については、「奄美郷土研究会の育成と指導高揚を成し遂げ、文学的精神的な影響力の浸透や、図書館の基盤確立や、南島文学研究と奄美文学史作成のための資料蒐集完備」を強調した（藤井 2005）。総じて、島尾の仕事の“内”には、多様な人物像が浮かび上がる（拙稿 2015）。

整理すると、名瀬における“島尾の仕事”として、史談会を再興のうえ、奄美郷土研究会を事務局から支え、郷土資料の組織化を図った①「郷土史家としての島尾」【カタログガー】、奄美に関わる作家を対象とした南島文学研究と奄美文学史作成のための収書を目指した②「作家としての島尾」【コレクター】、「貸出文庫」の充実を図るため、奄美群島全域への配本を指揮した③「分館長としての島尾」【デンドウシャ】、鹿児島県立大島高等学校、大島実業高等学校定時制非常勤講師として日本史・国語科を担当、かつ鹿児島純心女子短期大学非常勤講師として、琉球文学をテーマに出講した④「教師としての島尾」【センセイ】の4点に類別できる（拙稿 2015）。

なかでも、特に③に該当する分館長在任期間に文学仲間で敬愛する上司でもあった久保田彦穂（＝児童文学者である椋鳩十）鹿児島県立図書館長の庇護のもと、「親子二十分間読書運動」による全域サービスで運営の基盤確立を図った【デンドウシャ】としての業績が最も知られている（井谷 2015）。

しかし、藤井（2005）に拠れば、図書の選択や組織化といった収書業務こそが島尾の最も得意とする分野であり、総務や会計など運営統括業務は、分館長補佐に委ね、在職中は①【カタログガー】、『島にて』と名付けた読書会を立ち上げ、地域の文芸的伝統を築こうとした②【コレクター】に専心のうえ、コレクションの形成を図った。

本稿では“内”に該当する①、②におけるコレクションの形成過程についての節目を1961（昭和36）年に据え、当年5月の新聞記事「奄美の妹たち」、12月、平凡社版『世界教養全集第21巻』月報15号に「ヤポネシアの根っこ」を発表したことに着目する【表1】。これ以降、島尾のエッセイには、「琉球弧」「ヤポネシア」という語が多く使用された。現在「琉球弧」と

表1 「名瀬在住時の島尾」略年譜

西暦	昭和	年齢	島尾敏雄(琉球弧、ヤポネシア関係)、日米文化会館・奄美分館(コレクション形成)の動向
1955	30	38	10月、ミホ夫人の叔父である林恒敬・和子宅(名瀬市住吉町)に移住。
1956	31	39	4月、鹿児島県立大島高等学校、大島実業高等学校定時制の非常勤講師となる。 12月、名瀬市の聖心教会でカトリックの洗礼を受ける。
1957	32	40	2月、『名瀬だより』を「新日本文学」に連載(昭和34年1月まで)。 12月、鹿児島県職員となり、奄美日米文化会館館長に就任。
1958	33	41	1月、奄美郷土研究会が奄美日米文化会館内に事務局を置くことで世話人となる。 3月、大島高等学校退職。 4月、「県立図書館設置条例の一部を改正する条例」の施行により、県立図書館奄美分館設置を受け、初代分館長を兼務。 7～8月、熊本商科大学で司書講習を受講。
1959	34	42	3月、大島実業高等学校退職。
1960	35	43	3月、奄美分館蔵書が大蔵省財産であるため図書整理を行い、蔵書数3,733冊に減。 10月、短篇小説集『死の棘』を刊行。
1961	36	44	3月、「郷土資料分類目録」(昭和36年3月現在)を発行。 3月、『死の棘』により第11回芸術選奨を受賞。 5月、「読売新聞」夕刊に「奄美の妹たち」(『島尾敏雄全集第16巻』所収)発表。 そのなかで「琉球弧」という語を初めて使用。 12月、平凡社版『世界教養全集第21巻』月報15号に「ヤポネシアの根っこ」を発表。
1964	39	47	9月、奄美分館新館(名瀬市小俣町)へ移転。9月、鹿児島県図書館協会奄美支部結成。 10月15日、新館落成式挙行。館内に郷土資料室(31.5㎡)を新設。
1965	40	48	10月、奄美分館に隣接した官舎(名瀬市小俣町)に一家で転居。
1968	43	51	4月、奄美分館発足10周年記念図書購入予算による図書購入開始。
1969	44	52	2月、『琉球弧の視点から』を刊行。2月、自転車事故で長期入院。後遺症(頭部)が続き、数年苦しむ。 9月、「奄美分館郷土資料目録」(昭和44年3月31日現在)発行。
1970	45	53	3月、鹿児島純心女子短期大学非常勤講師となる(琉球文学について集中講義を行う)。 3月、「未来」に『琉球弧からの報告』を発表。 7月、「海」に『ヤポネシアと琉球弧』を発表。
1971	46	54	11月、「潮」に『琉球弧に住んで十六年』を発表。
1972	47	55	3月、「青い海」に『琉球弧が歩み出すために』を発表。 3月、「近世郷土資料復刻事業」開始。 6月、『日の移ろい』を「海」に連載(昭和51年9月まで)。
1975	50	58	4月、奄美分館長退任、指宿市西方に転居。鹿児島純心女子短期大学教授、図書館長就任。

島尾敏雄記念室講演会(第6回:2014年10月26日、第7回:2015年11月1日 於:奄美図書館)配布資料略年譜および『島尾敏雄展』(2011年11月かごしま近代文学館開催)展示会資料年譜をもとに加筆・修正。

いう用語は、奄美群島から沖縄本島、宮古・八重山諸島へと連なる島々の総称を示すとともに「奄美と沖縄の地域交流のための行政用語として使用」（島尾ミホ、志村 2000）されている。当時、島尾のコレクション形成における収書意識のなかでの「琉球弧」とは、“収集範囲における広域性の標榜”を第一義に挙げることができる。

なお、時代を遡ればコレクションは、島尾が来島する以前より幾分なりとも形成されている。よって、次章では源流と位置づけられる大島文化情報会館、その後継となる日米文化会館の収書状況、職員の収書意識を概観する。

### 3. コレクション形成に向けた収書意識

#### 3.1 島尾分館長就任以前：中原 四（あずま）の収書意識

「島尾コレクション」形成の萌芽は、米国軍政府下にあった1951（昭和26）年開館の大島文化情報会館、後継の日米文化会館における群島全域への配本、映写会の実施といった地方奉仕に見て取れる。そのなかで中心的な役割を担ったのが大島文化情報会館主事を務めた1916（大正5）年生まれの中原 四（あずま）であった。中原は、奄美群島が本土と行政分離されていた“奄美ルネッサンス”と呼ばれた7年間（1946～1953年）の日本復帰運動が沸騰する最中、地元有志による機関誌『自由』（自由社刊）に冷静な筆致で「文化情報会館の運営の役割」について論じた。

誌面では、「一般は種々様々であるから、蒐集する資料もすべての要望に應ずるよう、広い範囲にわたることが期待される。郷土資料、行政資料などを集めることも大事なことである」（中原 四 1951）と収書意識を述べた。中原は、1950（昭和25）年の図書館法施行直後に郷土資料や行政資料の整備の重要性について取り上げ、群島民への奉仕を第一義にする旨を表明するなど先進的な思考を持っており、現在の図書館運営にも相通じるところである<sup>8)</sup>。不幸にも、中原は1953（昭和28）年1月22日、奄美文化会館長就任当日の朝、忽然と心疾患によってこの世を去った。

夫の遺志を継ぎ、兼子夫人は1953（昭和28）年2月1日付けで後継の奄美琉米文化会館に入職、さらに日米文化会館開館時の初期メンバーの一人として、後に奄美分館に入職する島尾のみならず、ミホ夫人、長男伸三、長女マヤを公私にわたり支え続けた（中原兼子 2005）。



写真1 奄美日米文化会館 看板  
(2015年11月14日 筆者撮影)



写真2 USISから貸与の映画フィルム  
(2015年11月14日 筆者撮影)

現在、奄美図書館の書庫には奄美日米文化会館時代【写真1】に米国大使館文化交換局 (USIS : United States Information Service) から貸与、補給された洋書類 (1963年当時841冊所蔵) や巡回映写会用の16mm映画フィルムが目録整備も無いままで別置扱いとなっている【写真2】。奄美図書館で郷土資料の整理を担当している石本晃治指導主事によれば、「フィルムは梱包を一度も解いておらず、劣化している可能性が高い」という。書庫には日本復帰運動に関わる郷土誌も所蔵しており、『自由』のバックナンバーには島尾の寄贈が明らかな現物<sup>9)</sup>も存在する。

### 3.2 島尾分館長の収書意識

1955 (昭和30) 年、奄美郷土研究会を主宰した文 英吉<sup>10)</sup> が日米文化会館長に就任したことで、中原が描いた郷土資料収集の構想が膨らみ始めた。しかし、文は1957 (昭和32) 年2月6日に急逝、来島したばかりの島尾が同年12月にピンチヒッターとして分館長に就任した。就任時の職員態勢は【表2】のとおりである。島尾就任以前に入職していたのが、長きにわたり分館長補佐や分館長心得を務めた當田眞延と中原の妻の兼子である。島尾の在職期に関わった職員は10名を数えるが、ほぼ異動もなく固定されており、その殆どが鹿児島県立大島高等学校卒業の地元出身者いわゆる“シマッチュ職員”であった。また島尾は、分館長就任早々に熊本商科大学司書講習を受講し、資格を得て本腰を入れ司書業務にあたった。順次、職員の多くが別府大学司書・司書補講習を受講した【表2】。

表2 奄美分館開館時、島尾と勤務した歴代職員一覧

氏名	図書館在職期間	主な職位・担当係	司書・司書補講習受講状況
當田 眞延	1951 (昭和26) ~ 1975 (昭和50) 日米文化会館から引き続き勤務	分館長補佐 分館長心得	1965 (昭和40) 年 司書補 別府大学
中原 兼子	1953 (昭和28) ~ 1978 (昭和53) 日米文化会館から引き続き勤務	司書補 奄美郷土研究会事務担当	
島尾 敏雄	1957 (昭和32) ~ 1975 (昭和50) 日米文化会館から引き続き勤務	分館長 日米文化会館館長	1958 (昭和33) 年 司書 熊本商科大学
M・S	1958 (昭和33) ~ 1959 (昭和34)		
S・T	1958 (昭和33) ~ 1960 (昭和35)		
求 哲次	1958 (昭和33) ~ 1988 (昭和63)	主事補 郷土資料係 分館長補佐	1970 (昭和45) 年 司書 別府大学
S・H	1958 (昭和33) ~ 1962 (昭和37)		
徳 桂	1959 (昭和34) ~ 1985 (昭和60) 1992 (平成4) ~ 1994 (平成6)	主事補 貸出文庫係 分館長補佐	1977 (昭和52) 年 司書 別府大学
A・H	1959 (昭和34) ~ 1968 (昭和43)		1971 (昭和46) 年 司書補 別府大学
萩原富士郎	1959 (昭和34) ~ 1980 (昭和55)	主事補 総務係 1981年、鹿児島県立図書館 資料課長に転出	1967 (昭和42) 年 司書補 別府大学 1976 (昭和51) 年 司書 別府大学
S・E	1969 (昭和44) ~ 1974 (昭和49)		1969 (昭和44) 年 司書補 別府大学

新宮領道郎鹿児島県立奄美図書館長提供資料および奄美分館2009『鹿児島県立図書館奄美分館閉館記念誌』p84をもとに作成。職員5名については姓名をイニシャルで表記した。

1951(昭和26)年、日米文化会館に入職した當田は、島尾の意図を汲んだサービス指針を立案のうえ、行き届いた事務統轄によって業務の屋台骨を支えた。また、大島高等学校在学中に島尾から日本史を教わった当時最年少の萩原富士郎に拠れば、島尾は、部下全員に対し常日頃、口を酸っぱくして「郷土の資料を徹底的に集めろ」と説いたという<sup>11)</sup>。

また、別府大学との人的交流という点では、附属図書館司書で教育職員であった加藤一英が挙げられる。加藤は、司書講習講師として目録作成や分類付与演習といった整理技術に関する講義を長年受け持ったことから、1968(昭和43)年3月3日、鹿児島県立図書館協会奄美支部主催の図書館実務講習会に講師として招かれた。司書講習を受講した多くの分館職員と旧交を温め、島尾との面談を果たした。その際に加藤は、島尾が奄美の日本復帰に関して日本政府が打電した大量の電文の束を郷土資料として整理している点に感銘を受けた<sup>12)</sup>。折しも加藤が訪問した時期は、奄美郷土研究会の支援を受け、『名瀬市誌』編纂や郷土資料目録作成が大詰めを迎えた頃と考えられる。島尾にとっても、1969(昭和44)年に自転車事故で長期入院する直前であり、業務において最も充実していた時期と推察される。

島尾の職務は、館務報告や業務分掌<sup>13)</sup>をみる限り、「図書の選択分類に関すること、郷土資料の蒐集整理に関すること」が一貫して明記されている。島尾の収書意識は、老朽化かつ書庫が狭隘した奄美分館の1963(昭和38)年から始まった新館移設作業のなかで、独自の文化、歴史、言語を強調した「琉球弧資料」としての“広域の郷土資料”収集へと展開した。特に新館移設によって開室予定の郷土資料室では、「琉球を含め東南アジアにより共通性が見出せるので、意識的にこれらの資料を集め、南太平洋までに渡る文学、芸術、産業などこれまでバラバラだった全てのジャンルを集めた“南方コーナー構想”を作り関心を高める<sup>14)</sup>”という壮大な計画を錬成した。現実には“南方”までには至らなかったが、収集が軌道に乗ると、一般利用者に向けて目録を適宜刊行し、参考図書館としての機能を果たすことと相成った。その素地として島尾には、日々の業務ではあらゆる資料を製本し資料扱いにする収集癖があった。例えば、分館長室の来訪者に対し、入館名簿に必ず氏名の記入を促しファイル資料とした(橘川 2004)。さらにペーパーナイフで書評や地元紙に掲載された囲み記事を切り抜き、郷土資料として取り扱うオリジナルのインフォメーションファイルを別途作製していた(求 2005)。自転車事故以降は体調がすぐれず、気鬱に陥ることもしばしばだったが、島尾のエッセイ<sup>15)</sup>を見る限り、図書の選書作業だけは唯一手離さなかったことがわかる。因みに日記形式の小説『日の移ろい』には、島尾自身が手掛けた図書選択のありようが計11箇所、克明に描かれている<sup>16)</sup>。

#### 4. 『島尾コレクション』の形成

島尾による選書の成果は、郷土資料目録の完備で表出し、奄美分館、奄美図書館では計5点の目録を刊行した。なかでも奄美分館における郷土資料の収集は、1958(昭和33)年1月10日に再興した奄美郷土研究会の発足が契機となった【表1】。島尾が分館長在任中に刊行できた郷土資料目録は、2点である(後述の目録①、②)。島尾の後を継いだ栄喜久元<sup>17)</sup>分館長在任時には、組織化業務の態勢が整い、2点(後述の目録③、④)を刊行した。次いで特定コレクションの集大成として、奄美群島日本復帰50周年記念事業の一環である1点(後述の目録⑤)が完成した<sup>18)</sup>。以下、目録①から⑤の詳細を列挙のうえ、コレクションの形成過程をみていく。

### 目録① 1961 (昭和36) 年3月

#### 『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料分類目録：昭和36年3月現在』

目録①は、奄美分館の開館を起点に郷土資料収集の成果が初めて明らかになった公刊物といえる。その形式は、簡易な書誌事項が184点掲載されている“棒目録”と位置づけられる。分類構成は、歴史2類が52点、総記0類と社会科学3類が40点と、特定主題に傾斜せず、満遍なく収集していることが分かる。特色ある稀観書として探検家の笹森儀助著『南島探検』(1894 (明治27)年刊)、鹿児島県立大島高等学校図書部翻刻『大島・喜界島代官記：附大島与人役順続記』(1956 (昭和31)年刊)が挙げられる。

### 目録② 1969 (昭和44) 年7月

#### 『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料目録：昭和44年3月31日現在』

奄美分館は、1964 (昭和39) 年10月に新館を開館したが、郷土資料室に収蔵した資料を中心に刊行したのが目録②である。同年9月に発足した鹿児島県図書館協会奄美支部との共同刊行となっており、郷土資料系の求哲次が中心となって編んだものである。この目録では、分館が発足して約10年経過し、これまでの収集の成果として郷土資料コレクション1,884点が収録された。

目録の特色としては、独自の「郷土資料分類コード」を制定しており、収録範囲は、大島を中心に鹿児島県内、沖縄本島とほぼ「琉球弧」を網羅した。この目録の刊行を契機に1970 (昭和45) 年度収蔵分の書誌事項については、書誌分類における副出、分出の付与を実施し、資料検索への手がかりを簡便にした。このような利用者志向の目録再編の背景には、島尾が事務局を束ねた奄美郷土研究会が『奄美郷土研究会報』を刊行するなどレファレンスの需要が高まったことも後押しとなった。分館内でも1972 (昭和47) 年3月には「近世郷土資料復刻事業」が始まり『奄美史料』<sup>19)</sup>と名付けた復刻版の継続的な編纂態勢が整備された。

### 目録③ 1981 (昭和56) 年2月

#### 『鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料目録：昭和55年3月31日現在』

目録③は、これまでに収集した郷土資料コレクション5,433点 (凡例には、5,344点と記載。) の書誌が記述されている。結果、目録②の改訂増補を施した目録と位置づけられ、後述する目録④の編纂も加わり、栄分館長のもと、コレクション形成の充実期を迎えたといえる。また、収録対象である地理的範囲を7地方 (1 奄美諸島およびトカラ諸島地方、2 種子島・屋久島および周辺島地方、3 中部地方、4 南薩地方、5 北薩地方、6 大隅地方、7 沖縄地方) としていることから「琉球弧」の収書意識が滲み出ている。また、新たに「K319 奄美群島日本復帰資料」の分類項目を立てている点にも特徴がある。なお、資料の排架形式としては、同年4月に島尾を顕彰するかたちで館内に『島尾文庫』を開設、併せて『奄美郷土出身者著作コーナー』を設けた。

### 目録④ 1982 (昭和57) 年3月

#### 『島尾敏雄関係図書目録：昭和56年12月31日現在』

目録④は、『島尾文庫』を設置したことを契機に、郷土資料で主軸となる島尾に関する情報資源の集大成を試みたものと位置づけられる。當田分館長補佐は、目録④の「はしがき」に「奄美における文化的雰囲気に一層の濃密さを加えることを祈念してこの目録を編んだ」と記している。目録の編纂方針に注視すると『奄美郷土出身者著作コーナー』に排架した資料、従前からの郷土資料、一般図書扱いの資料から一部を『島尾文庫』へ組み込むという新たなコレクション形成の企図が明らかとなった。また、各年度の『要覧』の年表欄には「1985 (昭和60) 年4月、琉球弧



資料開設」<sup>20)</sup>との記述が見られるものの、全容が不明である。しかしながら、閉架書庫内に所蔵している一部の図書には、奥付貼付の請求記号ラベルに“琉球弧資料”の押印があるため、書架上で別置していた時期も存在したことが明らかとなった。

平成に入り、2002（平成14）年度には資料費を確保のうえ、新館移設に向けた本庁社会教育課との協議のなかで「開館後に展示するための島尾敏雄関連資料を収集する必要から、東京「神田」の古書店からも「草稿」を購入した」<sup>21)</sup>とある。

## 目録⑤ 2003（平成15）年10月

### 『奄美分館所蔵日本復帰関係図書目録：奄美群島日本復帰50周年記念』

サブタイトルで“書庫の息吹き”と銘打った目録⑤は、分館臨時職員の間 弘志<sup>22)</sup>が郷土資料を閲覧のうえ、編纂した。これは、2003（平成15）年の奄美群島日本復帰50周年に際し分館で開催した『図書館フェア～復帰運動のあゆみ展』事業の一環として作成されたものである。分類は、「当時資料、復帰協議会関係資料」、「当時資料、復帰協議会関係資料以外」、「復帰後資料」の3部構成で、45の小分類を付した計853枚のカード目録から採録した。

奄美図書館の郷土資料について最新（2014年度）の量的状況は、前述した目録①から⑤の編纂や1998（平成10）年3月に刊行した『奄美郷土史年表』を経て、35,000冊を超過するなど蔵書数が着実に伸長している【表3】。根底には中原、島尾、栄が示した郷土資料の拡充を図る取書意識

表3 島尾分館長時代の奄美分館・奄美図書館蔵書数の推移

年 度	一般図書	児童図書	貸出文庫	郷土資料	その 他	計
1958（昭和33）	※昭和33年5月31日現在（昭和33年3月末、日米文化会館閉館時の蔵書数5,053冊）					6,053
1959（昭和34）	2,036	522	245	124	806	3,733
1960（昭和35）	2,558	684	710	190	863	5,005
1962（昭和37）	3,801	874	2,288	579	841	8,383
1963（昭和38）	4,236	1,019	3,381	703	842	10,181
1964（昭和39）	4,797	1,101	4,068	848	864	11,678
1966（昭和41）	6,230	1,799	5,145	1,113	1,062	15,349
1967（昭和42）	6,713	2,040	5,889	1,572	1,158	17,372
1968（昭和43）	7,401	2,540	7,041	1,884	1,204	20,070
1969（昭和44）	8,170	3,276	8,360	2,139	1,256	23,201
1970（昭和45）	8,948	3,595	8,866	2,509	1,256	25,174
1971（昭和46）	9,593	4,005	9,896	2,991	1,256	27,741
1972（昭和47）	10,524	4,559	11,062	3,375	1,256	30,776
1973（昭和48）	11,170	5,050	11,648	3,614	1,256	32,738
1974（昭和49）	12,078	5,714	12,147	4,082	1,256	35,277

### 奄美図書館

2009（平成21）	87,958	29,481	24,876	25,018		167,333
2010（平成22）	95,864	29,427	24,296	29,620		179,207
2014（平成26）	113,201	33,750	23,700	35,837		206,488

※上記データは、奄美分館『奄美分館要覧』、『一年のあゆみ』（1961、1965年度はデータなし）、奄美図書館『平成22、23、27年度要覧』を基礎とする。表形式は、奄美図書館『平成23年度「島尾敏雄」企画展示計画（案）』を参考に加筆・修正した。

が込められており、その精神は、現在の奄美図書館における「郷土資料・琉球弧資料・島尾敏雄関連資料等の収集・整備に努める」との収集方針に堅持されている<sup>23)</sup>。

## 5. 考察

前述した目録編纂の経緯から考察すると、「島尾コレクション」の形成状況は、第一に島尾分館長自らが率先して、郷土資料の収集と整理を念頭に組織化が図られた「琉球弧的資料群」、第二に島尾の分館長退任後、後継の図書館職員が「文人図書館長」として顕彰するなかで創成された「文学館的資料群」とに大別できる【図2】。

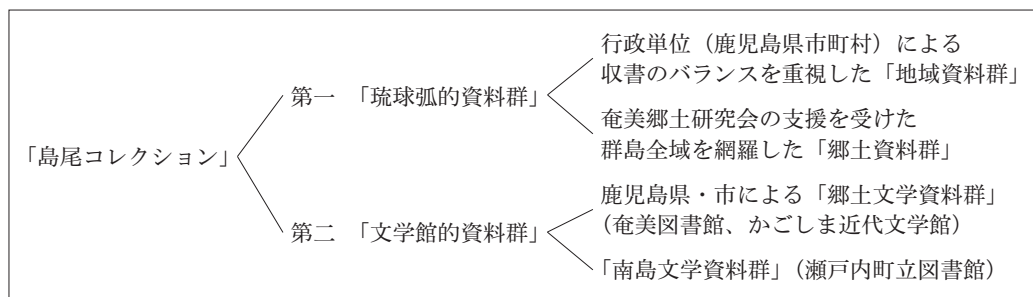


図2 「島尾コレクション」の形成状況

前者“第一”では、島尾が退任する1974（昭和49）年度には、県立図書館としての行政単位（県市町村）でのバランスを重視した「地域資料群」が揃い、かつ、『奄美史料』の編纂など奄美郷土研究会の支援を受けた「郷土資料群」を形成した。二つの資料群を併せると、群島全域をカバーする「琉球弧的資料群」と呼べるものとなる。コレクション形成の途上では、島尾が意図した前述の“南方”といった広域地域資料群としての「琉球弧資料」については、枠組みを策定しながらも、コレクションの位置付けが不明瞭なまま中断した経緯もあった。よって、島尾が分館長時代に描いた「琉球弧」という広域の視点を持った収書意識は、現在のところ、幾分薄れてきたと言わざるをえない。また収集のバランスという点では、沖縄本島、宮古・八重山諸島地域からの視点を併せ持った「琉球弧的資料群」とまでは言い切れない。

後者“第二”は、1981（昭和56）年4月の『島尾文庫』の設置が起点となる。すなわち、文庫の設置では、「郷土文学資料群」として形成過程にあるコレクションを“島尾敏雄”“島尾ミホ”を個人名件名として別置扱いのうえ、再編したことが収集の動力となった。また、別途に加計呂麻島の呑ノ浦に近い瀬戸内町立図書館では、開館当初から島尾の戦争体験とミホ夫人との関わりを意識した「南島文学資料群」の収集に比重を置いたかたちとなった。

「文学館的資料群」の整備は、ミホ夫人の存命中は膠着状態にあったものの、2007（平成19）年3月25日の夫人の死後に動き出した。新設の奄美図書館では、島尾家との購入交渉段階において、原稿や遺品類の一括架蔵は叶わなかった。コレクションの現状は、奄美図書館をはじめ、2011（平成23）年8月に島尾の原稿、日記、遺品類1311点を収蔵した鹿児島市のかごしま近代文学館、前述の瀬戸内町立図書館で「島尾コレクション」を分担保存する構図となっている。奄美図書館内の島尾敏雄記念室におけるコレクション形成の基本線は、寄贈や預託に立脚するという鹿児島県としての判断に基づいている。結果、島尾文学の源流である「文学館的資料群」は、鹿児島県・市による広域の視点に立った「郷土文学資料群」、集落を意識したきめ細やかな資料の涉猟を標榜した

瀬戸内町立図書館所蔵の「南島文学資料群」という二面性をもったコレクションを形成した【図2】。島尾文学揺籃の場ともいえる奄美群島を中心とした琉球弧の視点、南島文学の源流をふまえたコレクションの収集と組織化が理想ではあるが、2017（平成29）年の島尾生誕100年に向け、開放性を備えた保存図書館機能の構築が喫緊の課題といえよう。

## おわりに

奄美分館および奄美図書館のコレクション形成過程を概観するにあたり、群島地域の郷土研究会やNPO法人島尾敏雄顕彰会の活動が重要な要因であることは認識しているものの、本稿では触れるまでには至らなかった。今後の講究にあたっては、島尾分館長の後継である栄喜久元分館長時代の群島全域に目配りしたコレクション形成について精査する必要がある。

## 【謝辞】

本稿を草するに際し、現地調査では鹿児島県立奄美図書館の新宮領道郎館長、石本晃治指導主事、萩原富士郎元鹿児島県立図書館資料課長にご指導を仰いだ。記して、深謝の意を申し上げる。

## 【註】

- 1) 2013（平成25）年12月14日、九州国立博物館において『奄美群島：21世紀の可能性』と題したシンポジウムが開催された。奄美群島日本復帰60周年記念事業の一環として、地域メディア、現代文学研究、考古学、環境保護等の視点から研究成果や現状報告、提言がなされた。
- 2) <http://www.library.pref.kagoshima.jp/amami/files/2014/02/> 奄美図書館公式ウェブサイト「奄美図書館所蔵復帰関係資料著者順.pdf」（Accessed by 2015 11.21）
- 3) 本稿におけるコレクションとは、「図書館で所蔵する資料全体。利用目的、利用者層、主題、資料種別、資料形態など共通の特性を持ち、一まとまりとして運営、管理させる資料群」（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編 2013 『図書館情報学用語辞典 第4版』p80丸善出版）を指し、文献及び文書を包括する資料群として捉えている。
- 4) 1955（昭和30）年当時は、205,363人である（昭和30年国勢調査）。
- 5) 2010（平成22）年現在118,773人となっており、そのうち38.8%が奄美市（旧名瀬市域および旧住用、旧笠利町を含む）に居住している（平成22年国勢調査）。
- 6) 1962（昭和37）年時点では、奄美群島で17箇所の出張所を設置した。出張所は、1963（昭和38）年、サービスセンターに改称された。
- 7) ミホは、1919（大正8）年、大島大和村の旧家である長田家の長女として生まれた。実母の死後、加計呂麻島押角集落の実業家であった大平文一郎の養女となった。
- 8) 中原の業績は、「奄美新聞」（2013（平成25）年12月25日）で日本復帰記念日の特集記事として『戦後の奄美の社会教育：礎築いた中原 四』のなかで紹介された。
- 9) 奄美図書館に所蔵の『自由』（1954（昭和29）年2月廃刊）の標題紙には、「昭和39年2月18日島尾敏雄氏寄贈」と押印されている。同館では『郷土誌で振り返る「昭和の奄美」展』を開催（2015年12月8日開始）し、既に廃刊となっている郷土誌を展示している。
- 10) 元奄美博物館図書室職員の文 英吉（かざり・えいきち）は、『奄美民謡大観』、『奄美大島物語』を著したシマ唄研究の大家であり、奄美群島の日本復帰運動を主導した。
- 11) 2015（平成27）年2月13日に実施した聞き取り調査による。

- 12) 鹿児島県立図書館奄美分館報『島の根』(1968(昭和43)年6月6日発行)巻頭言「名瀬図書館訪問記(別府大学図書館 加藤一英)」による。
- 13) 奄美分館1964、『一年のあゆみ:昭和39年』による。
- 14) 『大島新聞』1964(昭和39)年2月19日付け記事。
- 15) 『図書館の秘儀』、『書庫に憑かれて』(『島尾敏雄全集 第14巻』晶文社に所収)が該当する。
- 16) 『日の移ろい』は、1972(昭和45)年度の奄美分館職員との公私にわたる交流を綴った小説と位置づけられる。初出は『海』(中央公論社)1972年6月号~同年9月号。図書選択が記述されているのは、1972年4月4日、6月25日、7月5日・7日・19日、10月16日、12月1日・2日・26日、1973年1月10日、3月13日の計11箇所である。
- 17) 栄喜久元(さかえ・きくもと)は、与論島出身の民俗研究家で奄美郷土研究会員として、島尾分館長時代からの「近世郷土資料復刻事業」を継続した。栄は、組織化業務の必要性から職員には司書資格の取得を推奨した。1981(昭和56)年7月、鹿児島県立図書館副館長に就任。
- 18) 奄美図書館刊行の目録以外には、元大島支庁長の入佐一俊編纂による総合目録『奄美関係資料目録』(1994(平成6)年8月 奄美文庫; 3 奄美文化財団刊)がある。
- 19) 奄美図書館公式ウェブサイトの蔵書検索システムに抛れば、2010(平成22)年3月に刊行した38号『旧正月見聞録』が最新版である。
- 20) 奄美図書館 2014、『平成26年度要覧』p2 1. 鹿児島県立奄美図書館のあゆみ による。
- 21) 奄美図書館開館準備作業を掲載した『閉館記念誌』2009, p18 菊川光雄氏の証言による。
- 22) 間 弘志(はざま・ひろし)は、奄美郷土研究会員で、2003(平成15)年に奄美戦後史の基礎資料となる『全記録分離期・軍政下時代の奄美復帰運動・文化運動』(南方新社)を纏めた。
- 23) 奄美図書館 2015、『平成27年度要覧』p4. 2. 運営方針及び努力点 2 努力点(8)による。

#### 【引用及び参考文献】

- 中原 四 1951. 文化情報會館とは? : その運営と特質. 『自由』昭和26年7月号 Vol. 5 p18~19
- 鹿児島県立図書館奄美分館 1958. 『県立図書館奄美分館要覧: 昭和33年5月末現在』
- 島尾敏雄 1964. 『鹿児島県立図書館奄美分館史稿』複写
- 名瀬市教育委員会 1993. 『戦後の奄美教育誌: 復帰40周年記念』p236~245
- 島尾ミホ、志村有弘 2000. 『島尾敏雄事典』勉誠出版. p250
- 藤井令一 2003. 島尾敏雄のみた奄美. 松本泰丈、田畑千秋編『奄美復帰50年: ヤマトとナハのはざままで』(現代のエスプリ 別冊) 至文堂. p96~97
- 田畑千秋 2004. 編集後記. 松本泰丈、田畑千秋編『奄美復帰50周年: ヤマトとナハのはざままで』(現代のエスプリ 別冊) 至文堂. p389~391
- 橘川文三 2004. 1975年3月20日 分館長室での橘川文三と島尾の対談から. 橘川文三著『西郷隆盛紀行』(文春学藝ライブラリー 歴史 10) 文藝春秋. p53~54)
- 藤井令一 2005. 証言・奄美の島尾敏雄. 高坂薫、西尾宣明編『南島へ南島から: 島尾敏雄研究』和泉書院. p300~311
- 中原兼子 2005. 島尾敏雄先生の思い出. 奄美・島尾敏雄研究会編『追想島尾敏雄: 奄美・沖縄・鹿児島』南方新社. p117~120
- 求 哲次 2005. 奄美分館長の仕事. 奄美・島尾敏雄研究会編『追想島尾敏雄: 奄美・沖縄・鹿児島』南方新社. p172~175
- 井谷泰彦 2007a. 奄美の図書館長 島尾敏雄: 図書館文化論の視点から. 『政治学論集』第25号

p45～61

井谷泰彦 2007b. 『図書館人物伝：図書館を育てた20人の功績と生涯』日外アソシエーツ. p211～232

鹿児島県立図書館奄美分館 2009. 『鹿児島県立図書館奄美分館閉館記念誌』

井谷泰彦 2015. ヤポネシアと図書館長：南島における島尾敏雄の一断面. 島尾伸三、志村有弘編『島尾敏雄とミホ 沖縄・九州』鼎書房. p185～193

早野喜久江 2015. 作家活動と図書館運営：奄美大島における島尾敏雄の場合. 島尾伸三、志村有弘編『島尾敏雄とミホ 沖縄・九州』鼎書房. p173～184

拙稿 2015. 奄美大島名瀬（ナセ）における図書館運営の特質：“島尾イズム”（島尾敏雄）の継承を中心として. 『図書館学』No.107 p32～43